

学校を好意的に思う訳はありません。家庭内の日常生活の中で、学校や教員に対する負の印象が醸し出され、それが自然に子どもにも伝わりますから、当然、子どもにも、学校や教員への負の印象が受け継がれ、教員や大人を信用出来なくなるのだと思います。この、北風タイプの教員は、子どもの上っ面の返事だけで統率が取れていると思ひ込み、実は子どもから信用されていない事に気付いていません。また、その原因が自分に在ることに気付いていません。それどころか、自分には、上手くクラス運営が出来ると思ひ違いをして、威圧感^{はなは}尊厳であり、我は人格者なりと、大きな勘違いをします。その勘違いが甚だしくなると、「先生と呼ばれるほどの馬鹿でなし」と揶揄^{やゆ}されるような教員になり、子ども、保護者、他の教員との歯車が噛み合わなくなつて、学校内の緊張状態を高め、そこから発生するいろいろな歪みが、子ども社会の『いじめ』として、姿を現しているように感じます。

当時の池中には、「太陽タイプ」の見本になる教員が居ました。ご自分のお子さんも、子どもたちと同年代だったからか、近所の子や、仲の良い知り合いの子の面倒を見るように、子どもたちと接しています。その先生の言葉から、子どもた

ちを信用していることが伝わって来ますし、近所のおばちゃんの距離感で子どもたちと人間関係を作り、授業をし、クラス作りをしていましたから、子どもたちも、余計なストレスを感じることが無かったのでしょう。彼女の周りには、いつも子どもたちが集まっていました。私が指図した訳ではありませんし、私の理想とする学校のために、無理してくれた訳でもありません。子どもたちの前で偉そうにせず、子どもたちを信じるという、彼女本来の姿勢が、私の求める『ほっこりしたクラス』と、『子どもの自尊感情を育むクラス』を作ってくれました。

このクラスでは、いじめは起こりにくいと思います。いじめには、いろんな論説があります。子ども社会で発生する、子どもの善悪の問題という、狭い視野で捉えていると、火種は消えないでしょう。学校内で限定すれば、最初に、大人である教員の意識を改革し、子どもには丁寧な対応をするだけで、校内のいじめ発生率は減少すると思っています。その根底に在るものは人権教育の理念であり、その徹底が為されれば、良い学校というレベルを超え、凄い教育機関が生まれるだろうと考えます。

子どもたちに、「人権って、どういうことやと思う？」と聞くと、「人が生まれな

がらに持っている権利や」とか、「人が自由なことや」と答えました。私は、『存在が、在るがままの姿で認められること』だと考えますが、それは、非常に困難なことです。自分は平気でも、他人から「そら、おかしいやろ」と突っ込まれることが、生きていればたくさんあります。私も若い頃からいっぱい突っ込まれてきました。この、「認めること」は、「言いたいことが有るのに、突っ込みを入れなかったり、指摘しなかったり、黙っていること」ではありません。私も突っ込まれることで救われた経験がたくさん有りましたから、指摘は必要だと考えますが、人権とは、『人には自分の在り方を自分で選ぶ権利が有り、それをそのまま認めることが、人権を認めること』だと思ふのです。例えば、大阪人にはツツコミを入れる時に、三秒ルールというものが有ります。三秒以内に突っ込まないと、^ま間と言葉の活きが悪くなって白けるからです、下手なお笑い芸人のように、何でもかんでも、考えずに、適当に突っ込んだら良いというものは無く、相手の放った言葉なり、態度なり、風体なりを酌^くんで、まず理解しようとして、相手のことを考えて、その思いに対する言葉を返すのが大阪人由来の人情から来るツツコミで、納得したのなら突っ込まなくても、笑顔で頷くだけで良いのです。突き